

も今後十年も経たらば觀るに足るものとならうといつて居られた。私は千九百廿一年から二年へかけての Seminar の假表を貰つたが、中には Po-hard 教授の English Constitutional History in the 15th and 16th centuries 其他私の知合のロンドン大學やケムブリッジ大學の教授以下の人々の各自專攻の題目が掲げられて居る。猶ほ毎週木曜日の夜にはロンドンで歴史關係の人々が此 Institute に集つて種々の打合をするとの事で、私にも出席を勧められたけれども、丁度當日は私がケムブリッジへ旅行する日と合つた爲めに其意を果たさなかつたが、後にエールの英國法制史専門の Ad-

青木昆陽傳補訂

青木昆陽の事蹟はこれまで種々の方面を多くの

ans 教授からも其會合の有益な事を聞かされて一入遺憾に思つた次第である。

斯様な譯であつて、今日では尙ほ完備の域に達して居ないにも拘らず、此 Institute は英吉利では新しい試みとして學界の注目を惹いて居るが、獨逸に行けば、決して珍しいものでもない。故に英吉利に於て何故にそれが獨逸に後れたか、又それが將來果して英吉利で發達を見ることが出來やうか、是等の問題について考へる前に一應獨逸の諸大學に於ける Historisches Seminar や Institut の説明に移ることとする。(此項未完)

文學博士 新 村 出

人々が細大にわたつて著述したものが知られてゐ

るが、多少補訂を要する點がないではないので、自分は従前から卑考を發表して見たいと思つてゐた。所が自分が平素關東の白石、徂徠の兩家に對して同代關西第一の碩學として崇敬する東涯、その東涯の門下に出でた二異才と並稱すべき梵學の慈雲と蘭學の昆陽とのうち、飲光尊者の事歴を自分が近頃考證したに因んで、この機會に於て、併せて甘藷先生の傳記中、一二重要な點について攷究を盡して見ようとするのである。

慈雲が東涯門下に出でたことについて予が新に疑念を起した如く、昆陽は東涯の弟子ではないと考へた日本經濟叢書第七冊の卷首に出でた瀧本博士の異説の如きものが出てゐるが、それは同名異人を間違へられたのであつて、昆陽はやはり紹述先生の門人であることは争はれぬ事實である。但し現に堀川の伊藤家に残つてゐる『初見帳』と題する東涯の門人帳の中には青木文藏の名は録してな

い。此厚い帳面は父仁齋の歿後より東涯一代即ち寶永三年より元文元年に至る三十有餘年間の入門覺帳であるが、享保年間を通じて始めに文藏の名もなく、終りに慈雲の名も見えぬ。慈雲の入門は享保二十年とされてゐる。昆陽の入門は大槻博士に従へば享保六七年以前といふ推定である。然るに自分が大正四年十二月右の入門帳を一閱した所では、寶永辛卯八年即ち正徳元年に伊勢の人青木尙賢の名が見え、享保二年に筑前の人青木道壽の名が載り、同五年に越前の人青木松恒の名が録され、同十七年に青木馬來内といふ名のみで國が記されてない入門者があつたのを認めただけで、青木姓のものはこの外その帳面には發見し得なかつた。然し後代の記録であるが、伊藤家に『表題に諸方宿所志』内題に『諸人宿所録』としてある帳面があつて、中程より終りの方に、

青木冬藏宿 かやば町大岡越前殿組中村文藏殿也

それから少し措いて

烏丸丸太町上ル町帯屋市郎右衛門

右中村作彌便

青木文藏殿中村にて届申候

と見えてゐる。この帳面の外、表に『諸用記』とあつて、裏に宿所附けが記してある別の帳面一冊があつて、伊藤家臣塚本惣八と大書してある。その宿所録の中に、

一 青木文藏便所 中村作彌

一 中村作彌便 帯屋市郎右衛門

と出てゐる。これらによつて堀川の伊藤氏と江戸の青木文藏との間に、後年(多分東涯歿後)に至るまで通信があつたことが知られる。然し師弟の關係はこれだけでは判明しない。

紹述先生文集には、青木生といふ名が三ヶ所に出てゐる。巻四の序類のうちと、巻五の記類のうちと、巻十の題跋類のうちとである。巻五に見え

てゐるのは、雪荷弓記といふ享保三年二月の選文中であるが、こゝに出て来る青木生は別人であらう。これは高弟なる勢州の奥田三角の『三角集』巻二に見える青木生と共に、或は伊勢人のそれであらう。紹述文集巻五には、年月を記るさない文章で、論語集解序といふ一篇がある。文章の末に、「青木生自東書來告刻成、俾予序文、因著其由云」とあるから、江戸の青木昆陽のことと推定し得られる。享保十七年壬子二月江戸須原屋茂兵衛出版の東厓考訂の論語集解二冊があるが、それには予の見た限り右の序文が附いてゐない。天明三年癸卯五月三都刊行の論語集解標記二冊本に、首に清原宣條の序文があり、その次に享保壬子之歲京兆伊藤長胤叙とある自筆の序文が刻してある。この本は大正七年十一月東京に於て催された昆陽先生百五十年記念展覽會に京都帝國大學圖書館より出陳した。江戸板の有原本は、自分の未だ見るを

得ざる所のものである。因みに云ふ、享保十年上洛して東涯に教を請うたことのある江戸の篠崎東海のと學辨の上卷に「論語何晏が集解は足利學校より出たる活字板本よし、近年東涯の序して板行せるは落字あり」とて、徂徠派の學者の事業と對比した所は頗る興味がある。山井荻生等の七經孟予考文補遺三十二卷が上梓された享保十六年の翌年に、我が紹述先生が考訂の論語集解が江戸で而も

昆陽の努力で出版されたのは、よほど面白い事だと思ふ。この享保十七年には前年十一月に春臺の序文を添へて紫芝園から古文孝經が出版されてをる。徂徠派全盛の江戸の眞中に於て古學派の昆陽がかかういふ事業に手を出したことは特筆すべきことである。これは蕃語の事を書出したより一年前の仕事であつて、無論登用以前のことであるから幕府の文庫に入つたり、又は古文書探訪に出張したりするよりも以前の業である。即ち蘭學を始め

るよりも十年以前、堀川より歸東してから十餘年後のこと、この時昆陽は三十五歳の中年期であつた。碑文に「學成歸江戸、下帷八町堀授徒」と見えた其頃で、父母の喪三年間を相尋いで服し果さんとした時分であつたのである。

さて紹述文集卷十五に享保七年壬寅四月朔日の選で跋青木生所藏先子遺墨といふ文章がある。その文の要略は、

青木生世貫于武、向遊京暫寓于予塾、頃者獲先子遺詠一紙、書來丐予題語(云々)

の如くである。仁齋の自筆短冊と東涯が右の全文を自書した別紙とが一幅の掛物に仕立てられて、今静岡市の近藤十太郎氏の所藏に存するのを見たことがある。仁齋の歌は、甘雨亭叢書刊本の仁齋先生歌集にも載つてゐる。東涯の筆蹟の方は、昆陽先生百五十年記念展覽會にその寫眞を出陳しておいた。享保七年といふと、昆陽が京都から江戸

に歸つて二三年程の後らしいが、丁度この年は彼が二十五歳で、東涯が五十三歳の時である。例によつて自製の年譜を検するに、昆陽が堀川在塾中かと思はれる享保初めの數年間は二三重要な事柄がある。其の一は、享保二年、仁齋門下の松岡玄達が番譜録一卷を著はして、薩摩芋の效用や栽培方などを述べたことである。補三十幅十一に收めた同書には昆陽の識語もあるが、然し京都で傳寫した本とは認められない。其の二は享保五年正月禁書の一部解禁を令したことである。但しこれは世人が誤解する如く西洋書閱讀の解禁ではなかつたのである。同じ年には、昆陽を後年大岡越前守に紹介した加藤枝直が與力となつてこの名奉行に従屬した。昆陽の先輩の同門ともいふべき野呂元丈が江戸に來住したのもこの年であつた。こんな時分に昆陽は、京都で修業して江戸に歸つて來た。

更に數年經つて享保十一年十月に昆陽は父を失ひ、三年の喪に服して、一年後享保十五年十月に至つて又母に別れてその喪を三年間行うた。この孝心が町奉行の與力加藤又左衛門枝直をして大岡忠相に上申せしむる基となつたのである。それから昆陽の立身となることは、人のよく知る所であるから略するが、その登用は、享保十八年であつた。五年後の元文三年九月に昆陽が自著の草廬雜

談卷上に三年之喪と題して、
中庸ニ云ク、三年之喪達于天子、父母之喪無貴賤一也ト、朱註父母ノ喪ト三年ノ喪トヲソカタズ、仁齋先生改メ註シテ云ク、三年ノ喪適孫爲祖及爲長子爲妻ト、カクノゴトクナラザレバ文通ゼズ。

と古學派の説を提擧し、さて自己の考按を述べてゐる。又同書下卷に『即字』と題して東涯の秉燭談卷四、「即字ノコト」の一節を引き、即の字を史漢

にてモシと讀む明徴なしと云つた師説の缺を補つた。漢書西南夷傳の文を引いて顔師古の註を擧げて、昆陽の云ふには、

コレ師ノ即ノモシトヨムノ明解ナルニ、タマタ
マワスレラル、トミヘタリ、我師ヲシテ他ノソ
シリヲウケシメンコトヲ欲セザルユヘニ、ミア
タリタルニ任テ記ス。

昆陽の師匠思ひの情がみえて面白い。草廬雜談_{卷下}の(中風)の條にも、秉燭談_{卷二}の所説を補うてゐる所が見える。

東涯の秉燭談は享保十四年の自序があるが、卷一には「和蘭國ノコト」と題する一節がある。九年後に出來た昆陽の草廬雜談下卷には既に「阿蘭陀文字」のことを記るし、又長崎人に支那の事物を尋ねたこともある。翌年の元文四年二月自序の續草廬雜談にも同様異域のことが見えてゐる。これらは、昆陽が蘭學を始めたといふ寛保元年よりも

二三年以前の事である。東涯より受けた感化は意外に大きいと自分たちは認めるものである。

東涯の學問は博くして深かつた。古義學に於ては畢竟父の説を紹述したるに止まるけれども、經濟學に於て博物學に於て考古學に於て、又制度故實の智識や言語文献の學問に於てもその造詣は博宏なる所がある。東の白石徂徠に對して遜色がない。制度通の類にせよ、用字格や名物六帖にせよ非常に有用な書物である。隨筆類には種々參考の資たるべきものが多く、異域に關する興味も時代に比して豊富であつた。殊に朝鮮に關する研究の如きは、白石を凌駕し、白石の采覽異言、南島志蝦夷志に對して東涯の三韓紀略は優にその特色を發揮してゐる。これら東西兩碩學の精しい比較は之を他日に譲るが、東涯門下は多士濟々、而も種々の方面に直接間接に一藝の士を輩出したことは白石の門人に殆ど比するに足るべき者が居ないの

とは大に相違してゐる。指導法に於て包容力に於て又その人格に於て軒輊する所がないとは云はれまい。白石も東涯を時に譽めてゐたことは、その手簡に於て窺はれる。

古學は元來經義の根本研究に據つて興つたものであるから、その感化がよくゆけば凡て事物を觀察するに後世の因襲やら學說やら理屈やらに捉はれずに直に根源に遡つて考證して見ようとする研究法を誘致するであらう。その代り偏すると、考證に流れるの餘り因循して活用を失ふといふ學者も出來よう。古義學を紹述した東涯は能くこの遡源的研究を典故制度等の上に、又言語文獻の上に應用し又經濟實用の側を忘れずに、その多方面な學才を以てよく後進を啓發して種々の専門學者や特技者を門下から輩出させた偉大なる學問教育者であつた。昆陽が蘭學を學ぶに至つたのも、慈雲が梵學を究むるに至つたのも、直に淵源に遡つて

事相實理を探りたいといふ學風から起つたとも考へられる。されば故人内田博士が井上博士著「日本古學派の哲學」短評〔内田銀藏講論集〕の中に於て、著者井上博士が東涯を以て一意退嬰家學を紹述せる一大儒に過ぎずとなし、又昆陽を以て堀川の徒に類せずとせられたのに對して異論を挾まれ昆陽の學は之を東涯と較ぶれば似た所がある趣を一言せられたのは、大に我が意を得たものと考へられるのである。明治以後には昆陽を以て蘭學者の泰斗として稱揚し、或は辛家は甘藷先生として祭立て、或は圖書館員は書物奉行の巨擘として推讚したけれども、その學問の根柢に於ては最も東涯の精神を發揚した第一人者と云はなければならぬ。無論後に登用されたのも、幕府の評定所の儒者及び書物奉行としてであつて、草創の功はあれども、蘭學そのものは極めて幼稚な程度に留まつた。尤も語學力は不十分であつたにしても、其着

眼點は非凡な所があつたのは、既に先輩の指摘した所である。

次の如き世評も亦昆陽の一面をあらはして居ると思ふから參考に擧げておく。天明八年頃に江戸で出來た『學者角力勝負附評判』（徳川文藝類聚第十二、評判記）を見ると、番附に前頭の七枚目に鳩巢室新助と昆陽青木文藏とを對せしめた。評判記にはかう載つてゐる。

御兩人とも用に立つ御學問、風りうに心を高くし經義にしばらくられる先生たちと一ツ所には論じられぬ、駿臺雜話や昆陽漫録はたが見てもよい御作。

わる口「さかなや」にもこんな男がある。

行司「さればさかなやだから、なほ御志が察しられてすさまじい、さつまいもの御趣向思ひきつた事、中々當時かやうなしうちをする人はない、昆陽先生の御勝と見えます。

さかなやとは昆陽は魚河岸の生れだからである。江戸ッ子だけに團扇は文藏にあがつた。但しかうやられては鳩巢にはちと氣の毒であるが、隨筆と薩摩芋とだけで片附けられては昆陽も少し迷惑である。

東涯の直接影響ではないにしても、朝鮮史または朝鮮の言語文字の研究に先鞭をつけた東涯の研究範圍と接觸するのは、昆陽漫録に見える朝鮮文獻の攷究である。その他この師弟兩人の隨筆などを讀んでゐると、時々二者の呼應を感じる點を書中に見出すことがあるが、二人の關係について言ふべき所は、これまでにし別の問題に移ることにする。

昆陽の傳記に、延享元年長崎に遊學したとか公命によつて出張したとが見えてゐるが、自分は少くとも延享元年にその事があつたことは否定するのみならず、昆陽が長崎に行つたといふ事の史料

は後世の編纂物を除くと、見當らぬから、其事柄の有無をも疑ふのである。『先哲叢談』卷八に見える本傳の末に昆陽の著述目録に「長崎問書」といふ書名を挙げ、大槻博士も『六大先哲』中の傳記にそれを挙げられたが、その記録は果して現存するか如何か覺束ない。國書解題に編者の名を録せざる同名の書があるが、古文書古記録の寫しの様で、長崎に行つて聞いた所を書いたものではないらしい。その書名からいへば、長崎人の江戸に來た者から聞いたのではないらしいが、ともかくもこの書目の存在だけでは、長崎行の明徴にはし難い。その他昆陽の自著のいづれにも長崎行の事を直接に記してないばかりでなく、間接にその事實を明示する文句は認められない。長崎より參府した阿蘭陀通詞に語學その他の事どもを聞いたことは勿論であるし、長崎又はそこを通過しての唐土西洋二方面の智識を諸方から得たことは確かである

が自身長崎その他へ行つて調べたことはなかつたと思ふ。昆陽は出張や編纂に關する年紀ダイトをかなり明記しておく方の人であるが、最も重要なべき長崎行のことを自著のどこにも録してない。無論寛保元年及二年東國地方に古文書を採訪した時の如く徳川實紀等には見えない。従つて公けの出張ではないことゝ疑はれる。奉使小録の如きものは出來てゐない。然るに洋學年表、外交志稿、日本教育史、蘭化先生などの明治舊代の名著にも、又明治末期の六大先哲にも、延享元年長崎行のことを特記してある。大槻如電翁は、明治十五年四月發行の學藝志林所載『洋學沿革考』には、「文藏の長崎に赴きは詳ならざれど延享二三年の事なるべし」と推考されたが、根據は挙げられなかつた。『蘭化先生年譜』の方には「延享元年奉命往長崎」云々と見え、『洋學年表』の方には、其年評定所儒者となり尋で命を奉じて長崎に往き云々と出てゐるが

いづれも所依を示してない。恐くは、皆、磐水翁の『蘭學階梯』卷上の「興學」の一節に、延享の頃、蘭學修業の爲として青木昆陽子をして長崎に遊學せしめ給ふ、昆陽命を奉じて彼地に至り西吉雄等の譯家に就て其事を扣いた云々と出てゐるのに據られたものと思ふ。然し蘭學階梯の此條は年代及事實齟齬し、蘭學開始を昆陽が延享西遊以後のこととした様な矛盾があつて信用し難い。この書は天明三年の編で同八年の刊行であるが、編述の時は磐水が二十七歳の時で、延享よりは凡四十年後、昆陽歿後僅に十五年にしかならぬけれど、多分前野杉田あたりの先輩からの傳聞に過ぎなからうから史料としては重きをおき難い。天明元年の自記と同六年の他序他跋のある磐水の『工六物新誌』の題言中にも昆陽の長崎行きを一言してあるが、これも動かし難き根據とはせられぬ。更に三十餘年を下つて文化十三年に杉田玄白が八十三歳の時に、

往年を追懷して書いた『蘭學事始』には昆陽の長崎遊學を延享の頃にやと思はると云つてある。玄白の方が磐水よりも二十四歳も年長であつたが、自身は延享年代は十二三歳であつたし又後年にも昆陽の教を奉じたわけではない。故にこの問題について玄白の語を過信してはならぬのである。況んや文化十三年の原序ある『先哲叢談』卷八の本傳、その他化政度以降の編者類にその事が出てゐても毫も疑を解くには足らない。

寛保二年三月以降年々江戸參府の蘭人と通詞とに接して語學及び事物を學び、その業績は寶曆八年まで十七年間分多少の斷續を以て小冊子十部と和蘭文字略考一部三卷とが現存してをる。四十五歳より六十一歳に及んでゐる。無論翻譯書の類は残つてゐない。長崎に學んで得た成績としては物足らぬ感じを起さしめるが、それは草創の際で止むを得ぬとしても、それらの冊子又は編著に、長

崎まで下つて相當の長期間に勉學した蹟は明示もされず又推測も出來ぬほどである。

以上の如く自分は昆陽の長崎行は、玄白や玄澤の如き蘭學界の先輩が明言し、明治以後の先賢が祖述せられるに拘はらず大に之を疑ふ者である。

延享元年西遊といふ説は斷乎としてその誤謬なることを信するが、その西遊を絶對的にないど斷言するまでには、もう少し確證を握らねばなるまい。東京帝國大學圖書館に加藤家日記といつて昆陽を世話した江戸町奉行の與力加藤枝直(千蔭の父)の日記が延享元年より明和七年に至る二十冊と安永元年より同七年に至る十四冊と都合三十四冊存在する。前二十冊は恰も延享以來昆陽の後半生二十六年間を包括してをる。延享元年度の分は、近世文藝叢書第十二日記部に編入されて明治四十五年に刊行されて人の知る所である。この一年間昆陽が屢々枝直の家に入入して書物を借用したり、又

枝直が千蔭を同伴して青木氏を訪問したりした様な記事があちこちに散見してゐるので、無論その中に長崎行のこともなく、又長く不在で加藤家に顔出しをせずにおたらしい様子も見えぬ。餘事ながら昆陽が眞淵や在滿とも接したと推せられる記事があり、又枝直が東涯の校正した令義解を昆陽から借りた様な興味ある記載(正月二十一日)もある。但し在滿の名は續昆陽漫録にも見えた。即ちこれらに由つて昆陽を一箇の蘭學者とのみ速斷することの早計なことが愈よくわかり、頗る多面的な學者であつたことの旁證を得たことゝもなるのである。さて東京大學の加藤家日記は、全部はをろか、延享二三年度の分すら極取急いで一閱した程であるから、やはり確言は出來ぬが、昆陽の西遊に關する資料は未だ見當てない。ともかくこの日記は種々のがはから文學史料になる所が多いが青木野呂桂川等の初期蘭學の傳記資料たるべきも

のをも含んでゐることを注意しておく。

以上昆陽と東涯との關係及び昆陽西遊の有無に關する卑見の大略を述べたが、その外増補したい

點が多々あるが、それは他日を期する。

(大正十二年二月二十一日稿)

朝鮮神教源流考 (四)

李 能 和

十七、夫 餘 神 教

〔眉叟記言李朝肅宗朝 相臣許穆撰〕檀君世家云。上古九夷之初

有桓因氏。桓因生神市。神市生檀君。檀君之後

有解夫婁。夫婁之後有金蛙。金蛙之後有朱蒙溫

祚。爲句麗百濟之祖。皆本於檀君氏。

李能和曰。夫餘句麗百濟。系出壇君。朝鮮東表日

出之國。故。亦各取日出之象。爲其國號。若諡號

若姓氏焉。系統昭昭。證據鑿々。卽如下述。

〔三國遺事〕天帝降于訖升骨城。乘五龍車。立都

稱王。號北扶餘。自稱名解慕漱。生子名扶婁。

以解爲氏。王。後因上帝之命。移都于東扶餘。

東明帝。繼北扶餘而興。立都于卒本川。爲卒本

扶餘。卽高句麗始祖。

李能和曰。觀此記事。扶餘神話。要不出於天日二

義焉。〔國號〕扶餘。Puk. 方言白也。日出而東方白

卽黎明之象也。〔姓氏〕解 Pa. 方言日也。故知扶餘

系統出於濊貉。Iuri-hoa. 蓋扶餘。繼濊貉諡即而建國

者也。三國志云。國之耆老。自言古之亡人。國有〔諡號〕東

明帝。亦卽曰日出之象也。解慕漱東明。皆受天之

命。是天子也。